現代韓国語の「-n kes-ita」文の使用条件と文法化について
—日本語の「ノダ」文との比較を中心に—

李　英蘭
東京大学大学院博士課程

1. はじめに

次の二つの例文は，いずれもご飯を食べない「理由」について述べているが，ノダと-n kes-ita（以下，kes-ita と表記）の使用に差が見られる．

(1) ［花子がご飯を食べないのを見て］
A：（花子は）なぜ食べないの？
B：美味しくない<u>んだ</u>.
맛이 없는 <u>거야</u>.

(2) ［B がご飯を食べないのを見て］
A：（あなたは）なぜ食べないの？
B：美味しくない<u>んだ</u>.
?맛이 없는 <u>거야</u>.

（1）と（2）の最も分かりやすい違いは，話し手が，誰についての理由を述べているかである．（1）では，第三者である花子がご飯を食べない理由について述べているのに対し，（2）では，話し手自身がご飯を食べない理由について述べている．が，ノダの使用は，いずれの場合でも，自然であるのに対し，kes-ita の場合，話し手自身のことについての理由を述べるときは，その使用が制限されている．

本稿では，（1）と（2）に現れている「美味しくない」という発話は，誰についての理由を述べているかという違い以外，文の性質が異なると考えている．結論から言うと，（1）の場合，B の発話は，話し手の推論の結果を表す〈判断文〉であり，この場合，ノダと kes-ita の使用は自然となる．それに対し，（2）の場合は，話し手の判断ではなく，話し手が既に事実として認識している〈事実文〉であり，この場合，kes-ita は用いられにくい．

このようにノダと kes-ita の理由を表す用法においても，両形式の使用条件は異なるようである．が，ノダと kes-ita に関する従来の研究においては，両形式の使用頻度や使用条件に大きな差があると指摘しているものの，その使用条件が具体的に何であるかまでは十分に示されていない．

そのため，本稿では，ノダと kes-ita の意味解釈には，いずれも二つの項

が必要であることに着目し，その二つの項の性質や関係を考察することによって両形式の使用条件の差を明らかにしたい．そして，その使用条件の違いをもとに，両形式の文法化の度合いを位置づけたい．

本稿の構成は，次のとおりである．

2節では，先行研究を検討し，問題点を探る．3節では，本考察の理論的枠組みと分析方法を述べる．4節では，ノダとkes-itaの使用条件を考察し，5節では，ノダとkes-itaの文法化の度合いを示す．最後に，6節では，結論を述べる．

2. 先行研究及び問題点

ノダとkes-itaに関する先行研究を検討する前に，本稿は，ノダとkes-itaの意味・機能を探るものではないことを断っておきたい[1]．本稿の主な目的は，ノダとの比較を通じて，kes-itaの使用条件を明らかにすることである．

そのため，2節では，まず，従来の研究においてのノダやkes-itaの意味・機能をそれぞれ概観した後，ノダとkes-itaを対照考察した研究での指摘について問題点を述べることにする．最後に，再構造化の観点から見た二種類のkes-itaについて簡単に紹介し，ノダとkes-itaの文法化の度合いを述べる際の注意点について述べる．

2.1 ノダとkes-itaの意味・機能に関する先行研究

ノダに関する研究は，非常に多く，その意味・機能についても様々な見解がある．これまでの先行研究においては，ノダの意味・機能を，「説明」とされるもの（久野 1973，寺村 1984，奥田 1990 等）から，「事情を表す」とされるもの（田野村 1990），ノダには「ムードのノダ」と「スコープのノダ」があるとされるもの（野田 1997），「関連づけ」とされるもの（松岡 1987，庵 2001，近藤 2011 等）まで，まちまちである．

一方，ノダに比べ，kes-itaに関する研究は，非常に少ない中，ノダとの対照考察を通じて，kes-itaの意味・機能を，ノダと同様に，「説明のモダリティ」表現とされるもの（李 2001，印 2006，幸松 2006，金 2008）が多い．その他，kes-ita の機能を「関連づけ」とされるもの（李 2009）や，本来，名詞文であったkes-itaの「主題－解説」構造[2]を保つために，表現形式に現れていない「主題」を求めているマーカーとされるもの（李 2013）などがある．

これらの研究は，一見それぞれ別々の見解のように見えるが，一つ共通点があることに注目したい．それは，ノダとkes-ita の意味を解釈する際は，二つの項，即ち，ノダやkes-itaで表される項と，それによって前提される項が必要である点である[3]．そのため，ノダとkes-itaの使用条件の差を探

る際，両形式の意味解釈に関わっている二つの項の性質を考察することは，非常に重要な意味があると思われる．

2.2　ノダと kes-ita の対照研究での指摘と問題点

ノダと kes-ita の意味・機能を比較した研究としては，李（2001），印（2006），幸松（2006），金（2008）などがある．これらの研究では，kes-ita は，ノダと同様，「説明のモダリティ」表現であり，前後の文を結びつけ，それについて様々な内容（結果や理由，事情など）を説明していると述べている（李 2001）．また，金（2008）は，kes-ita に比べ，ノダの方が使用頻度が高く，意味範囲が広い原因は，ノダは，「説明形式」としての基本的用法から派生的な用法まで発達しているのに対し，kes-ita は具体的な名詞としての意味が強いためであると述べている．つまり，ノダと kes-ita の使用頻度や使用条件に大きな差があるのは，ノダに比べ，kes-ita の文法化が進んでいないことに起因していると言える（崔 2005）．

が，これらの研究には，ノダに比べ，制限されていると指摘した kes-ita の使用条件が具体的に明示されていないという問題がある．また，ノダと kes-ita の文法化の度合いを述べるとき，よく言及されている kes-ita の名詞化の機能というのは，これらの研究では対象外としている再構造化が起きる前の kes ita 文であることも問題である．これについては，以下の 2.3 で詳しく述べる．

2.3　kes-ita の再構造化に関する先行研究

Sin（1993），Kim（1994），Yang（2005）などでは，kes-ita には，統語構造の異なる二種類の kes-ita が存在していると述べ，それぞれ kes-ita Ⅰ と kes-ita Ⅱ と呼んでいる．つまり，kes-ita Ⅰ は，kes が形式名詞として働き，名詞化の機能をしているもので，kes-ita を「kes＋ita」に分けることができる．それに対し，kes-ita Ⅱ は，kes に形式名詞としての働きがなく，「kes」と「ita」が「kes-ita」というひとかたまりの形式として再構造化され，名詞化の機能とは別の意味・機能をもっていると述べている[4]．

(3) 이 책은 내가 어제 읽은 <u>것이다</u>.
　　この本は，私が昨日読んだ<u>ものだ</u>.

(4) 아버지가 돌아온 <u>것이다</u>.
　　お父さんが帰ってきた<u>のだ</u>.

例文（3）と（4）の kes-ita は，それぞれ kes-ita Ⅰ と kes-ita Ⅱ の例である．ノダと kes-ita を比較する際は，主に kes-ita Ⅱ を対象としている．そ

れにもかかわらず，従来のノダと kes-ita の対照研究においては，この二つが混用され，両形式の文法化の度合いが安易に述べられていることには，疑問が残る．

本稿では，ノダと kes-ita の意味解釈に関わる二つの項の性質から考察する両形式の使用条件をもとに，kes-ita（この場合，kes-ita Ⅱ）の名詞文的性質を示し，両形式の文法化の度合いを位置づけたい．

以上、先行研究における問題点をまとめると、次のとおりである。

(5) 先行研究の問題点

①ノダと kes-ita の使用条件の差が具体的に示されていない．

②両形式の文法化の度合いについての判断根拠が不十分である．

3. 理論的枠組み及び分析方法

3.1 理論的枠組み

2 節で，ノダと kes-ita の使用条件を比較する際は，両形式の意味解釈に関わる二つの項を詳細に分析する必要があると述べた．そのとき，有効なのが，ノダによる説明の構造を二つの項の性質から考察した田中（1979）である．3.1 では，ノダと kes-ita の使用条件を考察する際の理論的枠組みとして，田中（1979）をまとめつつ，その中で重要な概念である「事実文」と「判断文」について述べる．その後，文法化について Hopper & Traugott（1993）をまとめる．

①ノダによる説明の構造（田中 1979）

田中（1979）は，ノダの文は，前提とされる文，あるいは状況との関係で分析しなければならないと述べ，ノダ文によって前提される文あるいは状況を「被説明項」，ノダを含む文を「説明項」とし，ノダによる説明の構造をこの二項の性質から考察した．

まず，ノダ文は，大きく被説明項が言語表現として現れる場合と，状況として現れる場合との二つに分けられると述べている．さらに，被説明項が状況として現れる場合は，話し手の行為が関与する場合としない場合とに分けることができる．一方，被説明項が言語表現として現れる場合は，その言語表現が命令・依頼などを表す場合と，断定表現とる場合に分けられる．

この中で，最も重要なのは，被説明項が言語表現として現れ，断定表現である場合，説明される項とノダで表される説明項の間には次のような説明の構造があるという指摘であろう．

(6) 熱がある．風邪をひいたのだ．　　A 事実文＋（判断文＋ノダ）

(7) 風邪をひいた．熱があるのだ．　　B 判断文＋（事実文＋ノダ）

(8) 風邪をひいた．雨に濡れたのだ．　　C 事実文＋（事実文＋ノダ）

（6）～（8）で分かるように，ノダによる説明は，「判断文」による説明と，「事実文」による説明とに分かれる．これについて益岡（1991）でも，前者を「帰結説明」，後者を「事情説明」と呼び，区別している．

ノダの意味・機能が「説明」であるかどうかの立場とは別に，田中（1979）で言うノダの「判断文」による説明の場合，ノダと kes-ita は対応しているが，「事実文」による説明の場合は，kes-ita は用いられないにくいことに注目したい．

(6') 열이 있다. 감기에 걸린 것이다.
(7') ?감기에 걸렸다. 열이 있는 것이다.
(8') ?감기에 걸렸다. 비에 젖은 것이다.

これは，ノダと kes-ita の使用条件を考察するとき，両形式で表される事態が「判断文」であるか，「事実文」であるかは重要なファクターであることを示唆している．そのため，本稿で言う「判断文」と「事実文」をここで定義しておく．

(9) 〈判断文〉と〈事実文〉の定義[5)]

〈判断文〉とは，話し手が，ある事態を認識し，そこから推論を行った結果，もう一つの別の事態を導き出したときの文であり，話し手が判断を行ったことを表す文である．

〈事実文〉とは，話し手の感情や事情など，話し手が既に事実として認識している文である．

②文法化（Hopper & Traugott 1993）

Hopper&Traugott(1993:xv)は、「文法化」を「語彙的要素や構造が，ある言語的文脈の中で，文法的機能を担うようになり，新たな文法機能として発展する過程である」と定義している。文法化という言語変化の動機づけは色々あるが，本稿では，語用論的強化（pragmatic strenthening）に注目したい．語用論的強化とは，文脈内で初めは必然的ではなかった結びつきが慣習化され，文法機能を担うようになったことである（Geis & Zwicky 1971、Traugott 1989、Traugott & König 1991、大堀 2002:195 再引用）．そして，文法化が具体的かつ客観的なものから主観的なものへと移行する過程であることから，ノダと kes-ita の使用条件の差を考察し，両形式の文法化の度合いの位置づけを示したい．

3.2 分析対象及び資料

本稿は，主に会話文を中心とし，平叙文におけるノダと kes-ita 文を対象とする．資料としては，韓国語の場合，21C Sejong Corpus の話し言葉データ，韓国のドラマシナリオ，韓国語母語話者の会話データ [6] などを用いる．が，これらの資料から抽出した用例は，本稿での主張の再確認に使用し，本稿では，説明の容易性のため，ノダに関する先行研究などで挙げられてきた最も典型的なノダの例文や作例を設定し，kes-ita との比較を行う．

3.3 分析方法

前述したように，ノダ文と kes-ita 文は，その意味解釈に二つの項が必要であることで共通している．ここでは便宜上，その二つの項のうち，ノダや kes-ita で表される項を事態（Y），それによって前提される項を事態（X）と呼ぶことにする．つまり，ノダと kes-ita は，次のような二つの事態によって意味解釈されるのである．

事態（X）	〈ノダ〉〈kes-ita〉 事態（Y）

一方，ノダと kes-ita は，「言い換え」や「理由・原因」など，両形式が用いられる用法にも類似性が見られる．そのため，本稿では，より多様な場面で用いられるノダの用法のうち，《言い換え》《結果》《理由・原因》《注意・命令》《気づき》《前置き》《告白》の用法を中心に，kes-ita との使用の差を考察する．

以下の 4 節からは，ノダと kes-ita 文において，上記の七つの用法を中心に，事態（X）と事態（Y）の性質や関係などを，次の四つの考察ポイントを確かめる形で論を進める．

(10) ノダと kes-ita の考察ポイント
①事態（X）は明示的であるか否か
②事態（X）と事態（Y）との関係
③事態（Y）の文の性質
④推論の方向

本稿の目的は，ノダとの対照考察を通じて，kes-ita の使用条件を明らかにし，ノダと kes-ita の文法化の度合いを位置づけることで，先行研究での諸問題点を解消することである．

4. ノダと kes-ita の使用条件

前節まで，ノダと kes-ita 文の意味解釈には，二つの項（事態（X）と事態（Y））が関わっていると述べた．ここでは，まず，事態（X）が明示的であるか否かについて考察しよう．

田中（1979）は，ノダ文の場合，事態（X）は，「言語表現として現れる場合と，状況として現れる場合がある」と述べている．つまり，ノダ文は，事態（X）が明示的に現れるか否かによって二つに分けられるのである．この点は，ノダと kes-ita の違いを考察するときも，非常に有効なファクターであると考えられる．なぜなら，事態（X）が明示的に言語化された場合に比べ，事態（X）が言語化されず状況として現れた場合，両形式の対応度は顕著に低くなるためである．この点に関しては，印（2006）や李（2013）でも「kes-ita を提示するには，何らかの「前提」が必要である」と指摘している．

そのため，以下では，事態（X）が，言語表現として現れる場合と，状況として現れる場合との二つに分けて，それぞれ分析を行うことにする．

4.1 事態（X）が言語表現として現れる場合

事態（X）が言語表現として現れる場合は，ノダと kes-ita の用法のうち，主に《言い換え》《結果》《理由・原因》を表す用法が当てはまる．これらの用法の場合，ノダと kes-ita の対応度は非常に高い．それは，事態（X）が言語化されることによって，その事態（X）を話し手と聞き手が共有し，それについて何かを述べるとき，ノダと kes-ita は用いられやすいためであると思われる．

ここでは，ノダと kes-ita の《言い換え》《結果》《理由・原因》を表す用法をそれぞれ，①事態（X）と事態（Y）との関係，②事態（Y）の文の性質，③推論の方向，という三つの観点から見て行きたい．

4.1.1 《言い換え》

ノダと kes-ita の《言い換え》を表す用法は，事態（X）を「言い換える」と，それは事態（Y）であると述べるものである．つまり，《言い換え》のノダと kes-ita 文は，ある事態（X）についてそれと同等なものを述べており，事態（X）と事態（Y）の間には「P=Q」という条件関係が成立する．

(11) 玄関にハイヒールが置いてあった．奈々子が戻ってきたのだ．
현관에 하이힐이 놓여 있었다. 나나코가 돌아온 것이다.

(12) 妹と駅まで一緒だった．というより，妹が私についてきたんだ．
【近藤】
여동생과 역까지 같이 갔다. 같이 갔다기 보다 여동생이 나를

따라 온 것이다.

例文（11）と（12）は，それぞれ「玄関にハイヒールが置いてあった」ということについて，それは「奈々子が戻ってきた」ということだ，「妹と駅まで一緒だった」ということについて，それは「妹が私についてきた」ということだと述べており，事態（X）と事態（Y）の間には，両方とも「P=Q」という条件関係が成りたっている．

また，例文（11）と（12）で，話し手は，話し手が認識している事態（X）から推論を行い，それと同じものであるもう一つの別の事態（Y）を導き出している．そのため，事態（Y）は推論の結果であり，話し手の判断を表している〈判断文〉であると言える．そして，X から Y を導き出す推論の方向は，「P(X)⇒Q(Y)」となる．

一方，次の（13）のように，事態（Y）が話し手の〈判断〉ではなく，既に事実として認識している場合，ノダは用いられるが，kes-ita はそのままでは用いられにくく，引用形式を伴うようになる．

（13）娘の学校は中高一貫校です．つまり，高校入試はないんです．【益岡】
딸의 학교는 중고교 통합 학교예요. 즉, 고등학교 입시가 { 없다는 거예요 / ?없는 거예요 }.

（13）は，話し手が発話時に「中高一貫校」から推論を行い「高校入試はない」ということを導きだしたのではなく，既に事実として認識していること述べただけのものである．

もし，（14）のように「中高一貫校」から「高校入試はない」と推論を行うときは，ノダと同様，kes-ita の使用も自然になる．

（14）A：娘さんは高校入試の準備しないんですか？
B：娘の学校は中高一貫校です．
A：じゃ，高校入試はないんですね．
그럼 고등학교 입시가 없는 거네요.

このように《言い換え》を表す場合，事態（X）と事態（Y）の間に「P=Q」の条件関係が成りたち，P から Q へと順方向で推論を行い，その推論の結果である事態（Y）を判断したことを表すとき，ノダと kes-ita の使用には，差がなく，非常に高い割合で対応している．

4.1.2 《結果》

次は，ノダと kes-ita が《結果》を表す用法を見る．《結果》の用法は，

事態（X）が原因・理由となり，その結果である事態（Y）が導き出されるものであり，事態（X）と事態（Y）の間には，「P→Q」という条件関係が成立する．

(15) 熱がある．風邪をひいたのだ．　【田中】
열이 있다. 감기에 걸린 것이다.

(16) 타로가 왔다. 이걸로 전원 모인 것이다.
太郎が来た．これで全員集まった｛わけ・の｝だ．

例文（15）は，「熱がある」ことから「風邪をひいた」という結果を引き出しており，例文（16）は，「太郎が来た」という事実を話し手が認識し，そこから推論を行い，「全員が集まった」という結果を導きだしている．その点で，（15）と（16）の事態（Y）は，話し手の推論による〈判断〉を表している．そして，原因・理由であるXから結果のYを導き出しているため，推論の方向は「P(X)⇒Q(Y)」の順方向である．この場合，ノダとkes-itaの使用には差が見られない．

但し，（16）のように，誰もが推論を行っても同じ結果が出るようなより客観的かつ論理的な推論の場合，日本語は，ノダより「ワケダ」の方がより自然と感じる．この点は，ノダとワケダの違いを説明する際，重要なポイントではないかと思われるが，これは，本稿の考察範囲を超えているため，今後の課題とする．が，kes-itaの使用条件から見ると，ノダに比べ，kes-itaはより客観的な事態を表すとき用いられると言える．

一方，《結果》を表す場合，次の（17）～（19）のように「理由節＋結果節」という複文をとることが多い．その際，「原因・理由」節には，原因・理由の表現が明示的に現れるという特徴がある．従来の研究においても，このような構造をもっている場合，ノダとkes-itaは対応しやすいと述べられている（印 2006）．

(17) 風邪をひいたので，学校を休んだのだ．
감기에 걸려서 학교를 쉰 거야.

(18) 忙しくて，連絡できなかったんだ．
바빠서 연락을 못한 거야.

(19) 漁師になるために，この島へ来たのだ．
어부가 되기 위해 이 섬에 온 거야.

例文（17）～（19）の事態（X）と事態（Y）はそれぞれ，「風邪をひいた」「忙しい」「漁師になりたい」という原因・理由と「学校を休んだ」「連絡ができなかった」「この島へ来た」という結果を表している．これらの例文には全て「P→Q」という帰結関係が成立しており，推論の方句も「P(X)⇒Q(Y)」の順方向である．が，（17）～（19）において事態（Y）は，〈判断文〉ではなく話し手が既に事実として認識している〈事実文〉であることが（15）や（16）と異なる点である．

（17）～（19）の例文は，文のレベルでは，《結果》を表しているように見えるが，次のように談話の中で考えてみると，《結果》ではなく，複文全体で《原因・理由》を表していることがわかる．

(20) A：（あなたは）なぜ学校を休んだの？
　　B：風邪をひいたので，学校を休んだんだ.
　　감기에 걸려서 학교를 쉰 거야.

（20）の場合，「学校を休んだ」という事態は，既にAとBとで共有している旧情報である．そして，話し手（B）しか知り得ない新情報[7]は，「風邪をひいた」という事態であり，「理由節」を含む複文全体がノダやkes-itaで表され，「学校を休んだ」理由について述べている．

ここで興味深いことは，ノダの場合，理由の部分だけをとってノダで表すことができるのに対し，kes-itaは，「理由節＋結果節」の構文を保ちつつ，kes-itaで表している点である．

(21) A：（あなたは）なぜ学校を休んだの？
　　B：風邪をひいたんだ.
　　?감기에 걸린 거야.

（21）では，「学校を休んだ」理由について「風邪をひいた」という事態だけをノダで表すことはできるが，kes-itaで表すことはできない．

本稿では，（17）～（20）のような例文は，《結果》ではなく《原因・理由》を表す用法とし，その詳細は，次の4.1.3で詳しく考察することにする．

以上，《結果》を表すノダとkes-ita文を考察したが，両形式が《結果》を表す場合は，《言い換え》と同様，「P→Q」の条件関係が成立し，その中で，事態（Y）が結果Qを判断した場合，ノダとkes-itaの使用には制約がなく，対応度も高い．

4.1.3 《原因・理由》

ノダとkes-ita文には，事態（X）が言語表現として現れ，ノダとkes-ita

で表される事態（Y）が，事態（X）の原因や理由を表すものがある．この場合，事態（X）と事態（Y）の間には「P→Q」という条件関係が成立し，ノダやkes-itaが用いられた事態（Y）は，原因や理由であるPを表している．このようにノダとkes-itaが，「P→Q」という条件関係の中で，《原因・理由》を表す場合，両形式の使用条件には，顕著な違いが見られる．

まず，ある〈事実〉から推論を行い，その原因・理由を〈判断〉したと示す場合，ノダとkes-itaは対応しているが，そうでない場合，kes-itaの使用は制限される．

(22) ［昨日，太郎が雨に濡れたのを見た］
今日，太郎は学校を休んだ．風邪をひいたのだ．
오늘 타로는 학교를 쉬었다. 감기에 걸린 것이다.

(23) ［花子がご飯を食べないのを見て］
A：（花子は）なぜ食べないの？
B：美味しくないんだ．
맛이 없는 거야.

（22）は，「今日，太郎は学校を休んだ」という事実から，その理由は「風邪をひいたためである」と判断している．但し，この場合，「昨日，太郎が雨に濡れたのを見た」などの「風邪をひいた」と判断できる根拠が必要である．そして，「昨日，太郎が雨に濡れた」という状況と「今日，太郎は学校を休んだ」という事実から，その理由を「風邪をひいた」と判断している．

（23）は，「花子がご飯を食べない」理由を，話し手が花子についてもっているあらゆる情報を根拠にして推論を行い，「美味しくないためである」と判断している．（22）の場合，花子に関する情報以外，「ご飯を食べない」理由として一般的に考えられる知識から推論を行うことも可能である．

例文（22）と（23）のようなノダとkes-ita文の場合，話し手は，事態（X）を〈事実〉として認識しており，推論を行った結果，事態（Y）と〈判断〉したことを示しているという特徴がある．また，第三者のことについて判断していることも特徴的である．この種のノダとkes-ita文の場合，両形式の使用は自然である．

一方，事態（Y）が話し手の〈判断〉でなくなる場合，kes-itaは用いられにくい．例えば，（22）の場合，「太郎は風邪をひいた」と聞いたときや，（23）の場合，直接花子から「美味しくない」と聞いたときは，kes-itaは用いられなくなる．それに対し，ノダは，そのような制約がない．

ノダとkes-itaが《原因・理由》を表すとき，事態（Y）が〈判断〉ではない場合は，話し手自身のことについて原因や理由を述べる場合が考えられ

る.

(24) (私は) 学校を休んだ. 風邪をひいたのだ.
(나는) 학교를 쉬었다.
감기에 {?걸린 것이다 / 걸렸기 때문이다 }.

(25) [B がご飯を食べないのを見て]
A : (あなたは) なぜ食べないの?
B : 美味しくないんだ.
{?맛이 없는 거야 / 맛이 없어서 }.

例文 (24) と (25) は, 第三者ではなく, 話し手自身のことについて「学校を休んだ」理由や「ご飯を食べない」理由を述べている. この場合, ノダは用いられるが, kes-ita は用いられない.

(24) の場合,「風邪をひいた」ということは, (22) のように「昨日, 私は雨に濡れた」「今日, 学校を休んだ」という事実から「たぶん私は風邪をひいたのだろう」と理由を判断しているものではない. 話し手が「風邪をひいた」ことは, 話し手にとっては既に〈事実〉として認識しているものである.

一方, (25) の場合も, 話し手にとって「美味しくない」ということは, 既に〈事実〉であり,「私がご飯を食べない理由は, たぶんこの料理は美味しくないだろう」と判断しているものではない.

例文 (24) や (25) のようにある事態 (X) の原因や理由として事態 (Y) を述べるとき, 事態 (Y) が話し手自身の事情であり, 既に事実として認識している場合, kes-ita の使用は制限される. このとき, 韓国語は, kes-ita ではなく, 原因・理由の表現を明示的に用いることになる.

従来の研究において, 次のような例文は, ノダと kes-ita が対応しない代表的な用例として挙げられている.

(26) 昨日, 休んでしまいました. 気分が悪かったのです. 【田中】
어제 (회사에) 안 갔어요.
속이 {?안 좋은 거예요 / 안 좋았거든요 }.

(27) [B が遅刻して]
A : 遅かったですね.
B : 電車の事故があったんです. 【近藤】
전철 사고가 {?있었던 거예요 / 있어서요 }.

例文（26）～（27）の事態（Y）は全て，事態（X）の原因や理由を述べているが，話し手自身の事情や感情を表しており，話し手が既に事実として認識しているものである．（26）～（27）のように，話し手自身の事情や感情など，事態（Y）の文の性質が〈判断文〉ではなく〈事実文〉の場合，話し手しか知り得ない新情報であれば，ノダは無理なく用いられる．それに対し，kes-ita は，〈判断〉でなければならないという制約がある．

これまでは，事態（Y）が事態（X）に対する《原因・理由》を表すとき，事態（X）の言語表現に断定表現をとる場合を見てきた．が，事態（X）の言語表現に命令や依頼などをとる場合がある．

(28) お金を下さい．本が買いたいんです．
돈 좀 주세요.
책을 {?사고 싶은 거예요 / 사고 싶으니까 / 사고 싶거든요 }.

(29) 一寸待ってください．話があるんです．
잠깐만요. 할 얘기가 {?있는 거예요 / 있으니까 / 있거든요 }

(30) あっ，あけといて．あいつが来るかもしれないんだ．
아 거기 비워둬. 그 녀석이 올 지도 { ?모르는 거야 / 모르니까 / 모르거든 }.

事態（X）の言語表現が命令や依頼の場合，ノダと kes-ita は殆ど対応していない．それは，これまで見てきたように，事態（Y）が推論による〈判断〉ではないことと，話し手自身の事情や感情であるためであると考えられる．

その他，この種の用例は，韓国語の構文形式の制約もかかわっていると思われる．韓国語において命令や依頼などの働きかけの文について理由を述べるときは，理由の表現のうち，「-(으)니까」のみが用いられるという制約がある．そのため，（28）～（30）の例文において，「-(으)니까」の使用は自然に聞こえる．「-(으)니까」以外に，「-거든」形式の使用も自然であるが，これについては，今後の課題とし，ここでは，事態（X）の言語表現に命令や依頼の場合は，その理由として kes-ita は用いられない程度でとどめよう．

最後に，前節で見た《結果》を表す用法と関連した様相をもう少し分析したい．事態（X）が《原因・理由》を表すとき，その事態が話し手自身についての事情や感情である場合，ノダは用いられるのに対し，kes-ita は用いられにくいと述べた．

(31) A：なぜ食べないんですか？

B：お腹が痛いんです.

a. ?배가 아픈 거예요.

b. 배가 아파서 안 먹는 거예요.

c. 배가 아파서요.

d. 배가 아파서 안 먹어요.

(32) ［Bが遅刻して］

A：遅かったですね.

B：電車の事故があったんです.

a. ?전철 사고가 있었던 거예요.

b. 전철 사고가 있어서 늦은 거예요.

c. 전철 사고가 있어서요.

d. 전철 사고가 있어서 늦었어요.

例文（31）と（32）は，それぞれ「食べない」理由や「遅れた」理由について話し手自身の事情である「お腹が痛い」「電車の事故があった」と述べている．この場合，ノダは用いられるが，理由を表す事態にそのままkes-itaを用いることはできない．その代わり，理由の表現を明示的に用いるか，「理由節＋結果節」という構文を使って，複文全体にkes-itaを用いることは可能である．

この点から見ると，kes-itaは，ある事態から推論を行ったもう一つの事態が判断である場合，用いられやすいが，その推論の方向が，PからQを導き出して，Qを判断したと示すとき，最も用いられやすいことが分かる．それに対し，QからPを引き出すときは，第三者のことについて誰が判断しても納得のいく原因や理由を判断する場合は，kes-itaの使用も自然になるが，話し手の主観的な領域に関わる原因や理由を判断ではなく事実として述べる場合は，kes-itaの使用には制約がかかる．つまり，kes-itaの使用には，PからQを引き出し，kes-itaがQの部分を表す順方向のとき，用いられやすいため，（31）と（32）の場合，「理由節＋（結果節＋kes-ita)」という構文が可能である．kes-itaの使用には常に，論理的な関係を示す構文が求められていると考えられる．そのうち，誰もが推論を行っても納得の行く第三者のことについて客観的に判断できる場合，kes-itaの使用が許されるのではなきかと思われる．

それに対し，ノダにはそのような制限がなく，（31）と（32）の場合，深層にある「お腹が痛い→食べない」「電車の事故があった→遅れた」の条件関係を，Pだけをとり立ててノダを用いて表面に表している．

このことから，kes-itaは，「XならY」のような構造の中，その構造に関わる要素を全て示そうとしているのに対し，ノダは「Y」だけを，または「X」

だけを示してもよい非常にゆるいものであると考えられる．

その中身を見ても，kes-ita は，一般的かつ客観的に容易に推論できるものに対して用いられるが，ノダは，話し手しか知り得ない話し手自身の事情や感情など，主観的なものにまで用いられる．

以上，事態（X）が言語表現として現れる場合，ノダと kes-ita の使用条件を考察した．この場合，事態（X）と事態（Y）の間に「P=Q」や「P→Q」といった「P なら Q」という条件関係が成立し，推論の方向が P から Q へという順方向であり，ノダと kes-ita が Q を表すとき，両形式の対応度は高い．即ち，事態（X）に対して《言い換え》や《結果》を表すときは，ノダと kes-ita の使用には差が見られなかった．

一方，推論の方向が Q から P へという逆方向であり，ノダと kes-ita が P を表わす《原因・理由》の用法の場合，kes-ita の使用は〈判断文〉に限るか，「理由節＋結果節」の構文全体を求めるという制限があった．

【表 1】は，事態（X）が明示的である場合，kes-ita が用いられやすい条件を示したものである．ノダの場合，このような制限は殆どない．

【表 1】kes-ita の使用条件（事態（X）が明示的である場合）

	事態（X）	事態（Y） 〈ノダ〉〈kes-ita〉
X と Y の関係	P=Q / P→Q	
X と Y の性質	〈事実〉	〈判断〉
推論の方向	P(X)⇒Q(Y)	

①事態（X）と事態（Y）の間に「P なら Q」という条件関係が成立するとき，推論の方向が P(X)⇒Q(Y)の順方向で，事態（Y）が Q を表す場合，kes-ita は用いられやすい．

②事態（X）は〈事実文〉，事態（Y）は〈判断文〉である場合，kes-ita は用いられやすい．

③事態（Y）は話し手自身の事情や感情を表すときは，kes-ita は用いられにくい．

次の 4.2 では，事態（X）が状況として現れる場合を考察する．

4.2 事態（X）が状況として現れる場合

前述したように，事態（X）が状況として現れる場合，ノダと kes-ita の対応度は非常に低い．それは，既に先行研究で指摘されている「kes-ita は前提を求めている（印 2006, 李 2013）」ことと無関係ではないだろう．

事態（X）が言語化されず，状況として現れる場合，kes-ita が用いられにくいことは確かであるが，いくつが kes-ita の使用が比較的に自然となる例がある．それは，言語化されなくても，話し手と聞き手が，その状況をお互いに共有している場合である．本稿では，事態（X）が明示的ではない場合でも，その事態（X）が見つけられやすく，事態（X）が明示的である場合と同様，事態（X）と事態（Y）の間に「P なら Q」という条件関係が成りたつか，あるいは kes-ita の本来の構造である「X は Y だ」のような構造が想定しやすいとき，kes-ita が用いられやすいと主張したい．

以下では，事態（X）が状況として現れる場合を，《注意・命令》《気づき》《前置き》《告白》との４つに分けて，それぞれの違いを考察する．

4.2.1 《注意・命令》

まず，《注意・命令》を表す用法である．

(33) さあ，飲みなさい，飲むのよ．　【雪国】
　　자, 마셔. 마시는 거야.

(34) 遊んでばかりいないで，勉強もするんですよ．　【近藤】
　　놀기만 하지 말고 공부도 하는 거예요.

例文（33）～（34）は，それぞれ，飲み場での相手（33）に，遊んでばかりいる人（34）に対して，「飲むこと」「勉強すること」を促している．《注意・命令》の場合，「飲みなさい」「遊んでばかりいないで」のように，注意や命令の表現が明示的に現れた後，ノダや kes-ita が用いられることから，注意や命令として解釈されやすい．

が，ノダと kes-ita が対応しているため，一見同様のものに見られるが，この種のノダと kes-ita 文は，《注意・命令》の仕組みにおいて異る特徴をもっている．

まず，kes-ita は，「～することは，～することだ」という解釈が可能であるのに対し，ノダの場合は不自然となる．

(33') ?さあ，飲みなさい，あなたがしなければならないことは，飲むのよ．
　　자, 마셔. 네가 해야 할 일은 마시는 거야.

(34') ?遊んでばかりいないで，あなたがしなければならないことは，勉強もするんですよ．
　　놀기만 하지 말고 당신이 해야 할 일은 공부도 하는 거예요.

（33'）と（34'）のように，kes-ita は，状況から「あなたがしなければならないこと」という事態（X）を想定し，それを言語化しても自然に聞こえる．それに対し，ノダの場合，事態（X）を想定した文は不自然であり，文レベルだと，ノダの代わりに「コトダ」の使用が自然となる．

次に，ノダの場合，（33）や（34）の状況では，「飲む」「勉強する」のような非ノダ文でも注意や命令の解釈ができる．そのため，この種のノダ文の機能を「命令」とみなさず，状況と関連づけて解釈するもの（近藤 2011）や，「飲む」という事態をノで準体化しているもの（野村 2013）などとされる見解もある．

それに対し，kes-ita は，「마신다」「공부한다」という非 kes-ita 文は，注意や命令の意味としては不自然となり，kes-ita を用いないなら，「마시라니까」「공부도 하세요」など命令の形式が用いられることになる．

以上のことから，《注意・命令》を表すノダと kes-ita は，形は対応しているが，その中身は異なるものであることがわかる．

《注意・命令》を表す kes-ita は，聞き手が置かれた状況から「聞き手がしなければならないこと」という事態（X）が想定しやすい場合，もちいられやすい．そして，「事態（X）することは，事態（Y）することだ」という構文が成りたつため，この種の kes-ita は，ノダではなく「コトダ」に近い性質をもっていると言える．この場合，事態（X）と事態（Y）は，「X は Y だ」という kes-ita 本来の名詞文として働いていると思われる．

4.2.2 《気づき》

ノダの場合，探し物をしていて発見したときや，ものの使い方が分かったときなどに，よく用いられる．このような《気づき》の用法の場合，kes-ita は用いられにくいと言われている．

(35) ［地面が濡れているのを見て］
あ，雨が降った<u>んだ</u>.
아，비가 왔네.

(36) ［財布を探していて］
あ，ここにあった<u>んだ</u>.
아，여기 있었네.

（35）と（36）は，事態（X）が言語化されず，状況として現れ，「雨が降った」「ここにあった」と気づいたときにノダが用いられた用例である．これらの場合，kes-ita は用いられない．

但し，事態（X）が言語化されなくても，事態（X）が容易に想定でき，

事態（X）と事態（Y）の間に「P ならQ」という条件関係が成りたつ場合は，kes-ita を用いることができる．

(37) ［電気のつけ方を調べていて］
あ，このスイッチを押すんだ．
아，이 스위치를 { 누르는 거구나 / ?누르구나 }.

（37）は，表面上は，（35）や（36）と同様《気づき》の用法であるが，（35）や（36）との違いは，「電気をつけたい」という事態（X）が想定しやすい点である．そして，その深層には，「電気をつたい．電気をつけるためには，このスイッチを押す」という「P→Q」の構造が成立する．探し物をしている（36）の場合，「財布を見つけたい」のように事態（X）を想定しても，「財布を見つけたい．財布を見つけるためには，ここにあった」には「P→Q」の条件関係は成り立たない．

このように kes-ita は，事態（X）が言語化されなくても，それを容易に探し出し，4.1 で見た「P→Q」という条件関係が成りたつ場合は，用いられやすい．それに対し，ノダは，論理的な条件関係が成りたたなくても，話し手が勝手にある状況と結びつけてノダで表すことができる．

この点は，ノダは，事態（X）と事態（Y）の間の関係が話し手の主観による関係であっても用いられるのに対し，kes-ita による二つの事態の関係は，「P ならQ」のようにより客観的かつ論理的な条件関係でなければならないことを示唆している．

4.2.3 《前置き》《告白》

最後に，ノダには，状況として現れた事態（X）が，話し手の心の中にあり，聞き手は知ることのできない《前置き》や《告白》の用法がある．これまでの kes-ita 文の特徴から見て分かるように，状況（X）が想定しにくいこれらの用法では，kes-ita は用いられない．

(38) 《前置き》
あのう，東京駅へ行きたいんですが，この道ですか．　【近藤】
저기요, 도쿄역에 { 가고 싶은데요 / ?가고 싶은 거예요 }.
이 길인가요?

(39) 《告白》
私，来月，結婚するんです．　【近藤】
저 다음달에 { 결혼해요 / ?결혼하는 거예요 }.

例文（38）と（39）は，話し手の中に内在しているある状況を勝手に結びつけ，「東京駅へ行きたい」と「来月，結婚する」という話し手しか知り得ない情報をノダで提示している．このような結びつけは，話し手による主観的な結びつけであり，ノダ文がどういう状況と結びつけられたかは，ノダ文の発話時の聞き手は知ることができない．これまで見てきた kes-ita の場合，事態（X）が状況として現れるときは，状況から事態（X）を容易に想定でき，事態（X）と事態（Y）の間に「P なら Q」という条件関係が成立するという条件があった．そのため，聞き手にとって知らない状況（X）と結びつけられるこの種のノダ文は，kes-ita とは全く対応しない．

以上，ノダと kes-ita 文において事態（X）が状況として現れる《注意・命令》《気づき》《前置き》《告白》の用法を考察した．ノダは，全ての用法において状況として現れる事態（X）が明確な場合でも曖昧な場合でも制約なしに用いられるのに対し，kes-ita の使用は，状況から事態（X）が容易に想定できる場合のみに限る．この点は，先行研究での指摘どおり，kes-ita 文は常に事態（X）という前提を求めていることを示唆している．

5. ノダと kes-ita の文法化の度合い

4 節で，ノダと kes-ita の使用条件を考察した．ここでは，それを kes-ita 本来の名詞性と結びつけて検討する．

まず，本来の kes-ita（この場合は kes-ita I を指しているため，以下では，便宜上，kes-ita I と表記）がもっている性質について簡単に述べると，kes-ita I は，「NP1 は NP2 だ」の統語構造をもち，NP2 は NP1 について何かを述べており，その NP1 は表現形式に明示的に現れる．

4 節で見た kes-ita（この場合は kes-ita II を指しているため，以下では，便宜上，kes-ita II と表記）も，事態（X）と事態（Y）との関係の中で，事態（Y）は事態（X）について何か（「言い換え」「原因・理由」など）を述べており，その事態（X）は言語表現として明示的に現れる場合，kes-ita の使用は自然である．事態（X）が言語表現ではなく状況として現れる場合でも，その状況から事態（X）を容易に見つけられる場合は，kes-ita の使用は自然であるが，そうでない場合は制限される．

それに対し，ノダの場合は，いずれの場合でも，制約をうけない点で，ノダに比べ，kes-ita には，kes-ita 本来の名詞文の性質が残っていると言える．

次に，文法化が語用論的強化によって客観的なものから主観的なものへと移行していくという観点からノダと kes-ita の使用条件を検討する．

kes-ita は，二つの事態の間に「P=Q」や「P→Q」など「P なら Q」という条件関係が成立するとき提示される．そして，P と Q による客観的・論理的な条件の場合，よく用いられる．それに対し，ノダは，ある事態（X）

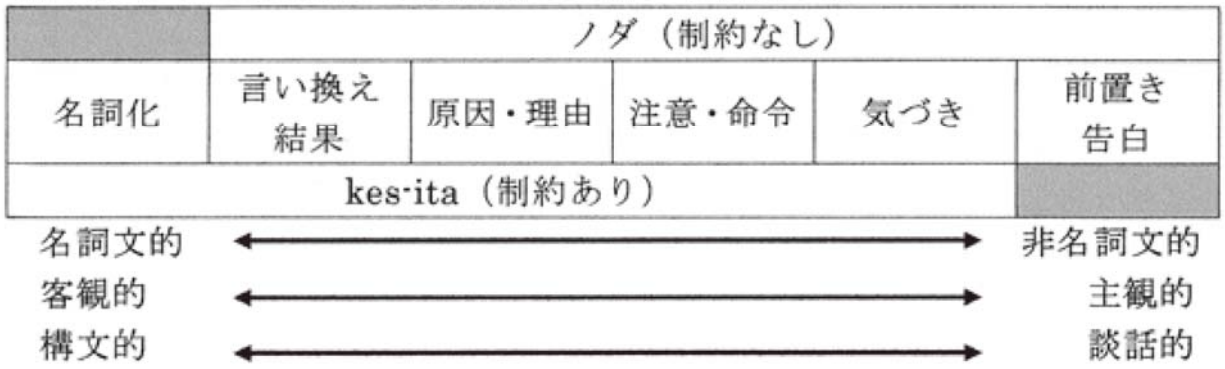
と話し手の感情や事情などを結びつける場合や，ノダで提示されている事態（Y）が何と結びつけられているかが曖昧な場合など，話し手の主観による二項関係の場合でも用いられる．その点で，ノダはより主観的であり，kes-ita はより客観的であると言える．

最後に，構文関係から両形式を比較してみる．

ノダは，「P→Q」という条件関係の中で原因・理由である P を導き出すとき，「P→Q」全体を表すことも，P だけを表すことも可能である．それに対し，kes-ita は，P だけを表したいときは，話し手の推論による判断でなければならないという制約がある．この点は，まだ kes-ita は，構文レベルにとどまっているのに対し，ノダは，構文レベルを超え，談話レベルで自由に用いられやすいことを示唆している．

以上，ノダと kes-ita の使用条件をもとに，両形式の文法化の度合いを示すと，次のとおりである．

【図 1】ノダと kes-ita の文法化の度合いの位置づけ



【図 1】で分かるように，kes-ita には，より名詞文的，より客観的，より構文的な性質が残っているため，ノダに比べ，文法化が進んでいないと言える．

6. おわりに

本稿では，ノダと kes-ita の使用条件を，その意味解釈に関わる二つの項の性質や関係の観点から考察した．そして，それをもとに，両形式の文法化の度合いを位置づけた．

先行研究での問題点は，①ノダと kes-ita の使用条件が具体的にしめされていないことと，②両形式の文法化の度合いを述べる際の判断根拠が不十分であることだった．

本稿では，kes-ita の使用には，①前提となる事態（X）が明示的であること，②kes-ita で表される事態（Y）が話し手の判断を表すこと，③事態（X）と事態（Y）の間には，何らかの客観的な条件関係が成立することなどの制約がかかるのに対し，ノダにはそのような制約がないと述べた．また，

ノダに比べ，kes-ita の文法化が進んでいないと判断した根拠として，kes-ita に名詞文的，客観的，構文的な性質があることを突き止めた．

本稿の考察結果は，ノダと kes-ita の違いを明確にしていることは有意義である思われるが，まだ課題はたくさん残っている．例えば，「어제 영화관에 갔는데 타로가 있는 거야.[8]」のような文に現れる kes-ita の働きがそうである．この種の kes-ita は，文レベルではなく談話のレベルで分析しなければならないものとし，今後の課題としたい．

《註》

1) ノダと kes-ita の意味・機能を突き止めるのは，本稿の考察範囲を超えているため，今後の課題とし，本稿では，両形式の意味解釈に関わる二つの項の性質や関係を中心にその使用条件の差を考察する．
2) 李（2013）では，kes-ita の本来の機能は，述語を名詞化し，文全体を名詞文とすることと述べている．そして，本来の kes-ita 文は，「X は Y だ」という統語構造をもち，Y は主題 X について述べている点で，「主題－解説」構造をもっていると述べている．
3) ノダと kes-ita の意味・機能を，「説明」とされる見解は，この二つの項を「説明される項」と「説明する項」という観点から見るものであり，「関連づけ」とされる見解は，「関連づけられる項」と「関連づける項」という観点から見ているものである．
4) これらの研究では，kes-ita Ⅱの意味を当該事態の「強調」，「断定」，「確認」などとしているが，その意味の詳細については殆ど触れていない．
5) 田中（1797）は，「事実文」とは，「断定文のうち，その文の表わす情報が発話者の感覚を通して直接得られたものであり，同様の方法で聞き手にも得られるものであるか，その情報が発話者に属していると一般に認められているのである」と述べ，「判断文」とは，「話し手の判断を表す文」であり，「断定文も判断文であることがある」と述べている．
6) 韓国語母語話者の会話データは吉田さち氏によるもの．
7) 近藤（2011）では，「P→Q の関係でも P＝Q の関係でも，ノダ文で導入される情報は話し手しか知り得ない情報である．話し手は，聞き手と共有している何らかの情報に，聞き手にとっての新情報と信じている情報を関連づける」と述べている．
8) 先行研究では，この種の kes-ita 文について殆ど取り扱っていないが，実際の会話では，たくさん用いられている．

《参考文献》

庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』．スリーエーネットワーク．pp.282-299.

李南姫（2001）「現代日本語の「のだ」文の総合的な研究」．大東文化大学大学院　博士論文．

李英蘭（2009）「韓国語の「geos-ida」文の分析：「geos」の意味拡張を中心に」．東京大学大学院　修士論文．

李英蘭（2013）「韓国語の「-n kes-ita」文について－「主題－解説」構造の観点から－」『言語情報科学』11．東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻．pp.69-85.

印省熙（2006）「日本語の「のだ」と韓国語の「-ㄴ 것이다」：会話文の平叙文の場合」『朝鮮語研究』3．くろしお出版．pp.51-94.

大堀壽夫（2002）『認知言語学』．東京大学出版会．

奥田靖雄（1990）「説明（その１）－のだ，のである，のです－」『ことばの科学４』．むぎ書房．pp.173-216.

金廷珉（2008）「日本語の「のだ」と韓国語の「KES-ITA」の意味に関する対照研究」．東北大学大学院紀要．pp.123-133.

久野暲（1973）『日本文法研究』．大修館書店．

近藤安月子（2011）「「します」と「するんです」－ノダの意味と機能」『言語科学の世界へ』東京大学言語情報科学専攻(編)．東京大学出版会．pp.2-15.

田中望（1979）「日常言語における“説明”について」『日本語と日本語教育』8．慶応義塾大学国際センター．pp.49-64.

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ：「のだ」の意味と用法』．和泉書院．

崔眞姫（2005）「「のだ」の文法化と機能別必須性に関する研究」．新戸学院大学大学院　博士論文．

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスの意味Ⅱ』．くろしお出版．

名嶋義直（2007）『ノダの意味・機能－関連性理論の観点から』．くろしお出版．

西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句』．ひつじ書房．

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』．ひつじ書房．

日本記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法４』第８部 モダリティ．くろしお出版．

野田春美（1997）『「の(だ)」の機能』．くろしお出版．

野村剛史（2013）「ノダ文の文法記述」『國語と國文学』Vol.89-11．東京大学国語国文学会明治書院．pp.90-100.

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』．くろしお出版．

益岡隆志(2007)「説明のモダリティ」『日本語モダリティ探究』．くろしお出版．pp.85-108.

松岡弘（1987）「「のだ」の文・「わけだ」の文に関する一考察」『言語文化』24．pp.3-20.

幸松英恵（2006）「「のだ」と'것이다'の日韓対照研究：翻訳比較を通して見る共通点と相違点」『日本語と朝鮮語の対照研究』．東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば－進化認知科学的展開」研究報告書．pp.107-158.

吉川武時(編)(2003)『形式名詞がこれでわかる』．ひつじ書房．

Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth Closs（1993）『Grammaticalization』．Cambridge University Press.（日野資成(訳)『文法化』．九州大学出版会．2003）

Kim Ci-un (1998)『우리말 양태용언 구문 연구』．韓国文化社．

Kim, Ki-hyek (2000)「지정의 문법 범주」『이중언어학』第 17 号. pp.77-95.
Kim, Sang-ki (1994) 「관형형어미＋kes-ita 구문 연구」. 東亜大学大学院 修士論文.
Nam, Ki-sim (1991)「불완전명사'것'의 쓰임」『국어의 이해와 인식』. pp.77-88.
Nam, Ki-sim (2001)『현대국어통사론』. 太学社.
Pak, Cay-yen (2006)『한국어 양태 어미 연구』. 太学社.
Sin, Sen-kyeng (1993)「'것이다'구문에 관하여」『국어학』Vol.23-1. pp.119-158.
Yang, Tay-yeng (2005)「'것이다'構文 研究」. 韓国外国語大学大学院 修士論文.

현대 한국어의 '-ㄴ 것이다'문의 사용조건과 문법화에 대해
- 일본어의 'noda'와의 비교를 중심으로 -

이 영란
도쿄대학대학원 박사과정

현대 한국어의 문말에 나타나는 '-ㄴ 것이다(이하 kes-ita 로 표기)'는 문중에 나타나는 '-ㄴ 것'과는 달리 화자의 심적 태도를 나타낼 때 사용된다. 그런 점에서 일본어의 양태 표현인 'noda'와의 비교가 종종 일어나는데, kes-ita 는 noda 에 비해 사용 빈도가 낮고 사용 조건에 있어서도 noda 와 큰 차이를 보이기 때문에 kes-ita 의 문법화가 noda 에 비해 진행되지 않았다는 지적이 있었다. 하지만 선행 연구에 있어서 noda 와 kes-ita 의 사용 조건이 구체적으로 명시되지 않은 점과 두 형식의 문법화의 발달 정도에 대한 판단 근거가 부족하다는 문제점이 있었다.

본 연구에서는 이와 같은 선행 연구의 문제점을 해소하기 위해 noda 와 kes-ita 의 의미를 해석할 때는 noda 와 kes-ita 가 제시된 사태(Y)와 그에 의해 전제되는 사태(X)가 필요하다는 점에 주목하여 두 사태의 성질과 관계를 고찰함으로써 noda 와 kes-ita 의 사용 조건과 문법화의 정도를 제시했다.

그 결과, kes-ita 는 전제되는 사태(X)가 발화로서 나타나거나 상황으로부터 쉽게 유추해 낼 수 있는 등 명시적인 경우에 사용되는데 비해, noda 에는 그러한 제약이 없었다. 또한 kes-ita 는 화자가 사태(X)로부터 추론을 한 결과 사태(Y)라고 판단했을 때 사용되는데 비해, noda 는 화자의 판단 외에도 화자의 감정이나 사정 등 화자가 사실로 인식하고 있는 사태(Y)를 언급할 때도 사용할 수 있었다. 마지막으로 kes-ita 의 사용에는 'P→Q'라는 조건 관계에서 주로 P 와 Q 전체를 제시하는 등 구문적인 제약이 있는 반면, noda 는 P 만을 제시할 때도 사용할 수 있다는 점에서 구문적인 제약이 없었다.

따라서 kes-ita 는 noda 에 비해 보다 명사문적이며 객관적이고 구문적이라는 성질을 갖고 있지만, noda 는 kes-ita 와는 달리 명사문적인 성질이 없으며 보다 주관적이며 구문 구조를 넘어서고 있다고 할 수 있다. 이러한 점으로 미루어 볼 때 kes-ita 는 noda 보다 문법화가 덜 진행되었다고 생각된다.